

まえがき

神奈川大学 21 世紀 COE プログラムの共同研究として「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」に取り組むなかで「海外神社（跡地）に関するデータベース」を構築し、Web 上に公開した。このデータベースは COE における研究調査の過程で収集した諸資料がベースとなっている。さらに、非文字資料研究センターに移行後もデータベースの増補改定を繰り返している。このデータベースを切っ掛けに、在野の研究者などを糾合し、海外神社研究の情報交換の場である「海外神社研究会」を立ち上げ、活動を開始した。この「海外神社研究会」を基盤に発足したのが非文字資料研究センターの第二期共同研究のひとつ「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」班である。この共同研究は、景観の持続と変容の観点から、海外神社の跡地の現地調査および資料収集を行い、各海外神社の成立・変遷・消滅を探るとともに、戦後の神社跡地の持続と変容過程の解明を図るなかから、海外神社とは何かを考え、海外神社研究の方法を整序し、体系化を図ることが目的であった。しかし、共同研究は、2011 年度から 13 年度に渡る 3 ヶ年と限定されたものであり、おのずと限界を持つものとなった。体系化の前提となる基礎的データの収集・整理に多くの時間とエネルギーを費やし、結果的には体系化以前の段階で終わってしまった。とはいえ、我々に体系化への意欲がなかったというわけではなく、海外神社研究の研究段階が、一般化を許す段階にまで、まだ至っていないのが現状であるといわねばならない。たとえば、「海外神社」の定義についても、まだ確定できる段階に至っていないであろう。台湾や樺太さらに朝鮮は現在においてはともかく、神社成立期においては政治的には大日本帝国に併合されており、厳密には海外（外国）とはいえない。そのように考えると研究の根本となる海外神社の定義から再検討をしなければならないともいえよう。

本研究成果報告書には、8 本の論考を収録した。公開研究会の報告に関わる内容をもとにまとめられたものが、中島、黄、津田の論考である。また、従来から持続したテーマを今期の調査研究に関わるなかでまとめられたものが、坂井、金子の論考である。また、今期の各自の現地調査をもとにその報告を中心にまとめたものが、辻子、稲宮、渡邊の論考である。

今期の 3 年間では、所期の目的を達成するまでには至らなかったという反省はある。しかし、体系化は海外神社研究がある程度完成に近づいたときのみ達成される課題であるのかもしれない。新たな研究テーマのもと、新たな陣容で、大きく見れば海外神社研究に関する新たな共同研究班が立ち上がるという。新たな共同研究班に今後の海外神社研究の進展を託したい。

ともあれ、本研究成果報告書の刊行をもって、今期 3 年間の「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」班の研究総括にかえたい。

2014 年 3 月

非文字資料研究センター 海外神社跡地から見た景観と持続の変容研究班代表
津田良樹